

『若きパルク』訳詩史稿（Ⅱ）

— 第102行～第208行 —

Translated *La Jeune Parque* into Japanese (Ⅱ)

— 1.102 — 1.208 —

辻 憲 男

TSUJI Norio

要旨：ヴァレリーの詩篇『若きパルク』*La Jeune Parque* (1917年) の訳詩史のための覚え書き。菱山修三の初訳(1942年)以後、田辺元、矢内原伊作・原亨吉、鈴木信太郎、平井啓之、井沢義雄、中井久夫(1995年)に至る半世紀の、七度の諸家の訳文を行を逐って比較対照した。紙幅の都合により四部に分け、この(Ⅱ)では全512行のうちの第102行から第208行までを印行する。

キーワード：『若きパルク』、ヴァレリー、訳詩

前稿(Ⅰ)と同じく、詩本文の分節は、下記の鈴木信太郎訳注『ヴァレリー全集』に引く、ヴァレリー自身の〔一〕～〔十五〕の文段区分に従った。便宜により、プレイヤッド版原詩の2行または1行ごとに掲出し、その訳文を時代順に並列対照させた。それゆえ切れ目のない訳文が次行以下にわたり、しばしば相前後する箇所がある。なお紙幅の都合上四部に分け、この(Ⅱ)では、前稿に続く〔五〕第102行から〔八〕第208行までを印行することとした。

〔一〕第1～37行、〔二〕第38～49行、〔三〕第50～96行、〔四〕第97～101行、〔五〕第102～148行、〔六〕第148～172行、〔七〕第173～189行、〔八〕第190～208行、〔九〕第209～324行、〔十〕第325～347行、〔十一〕第348～360行、〔十二〕第361～380行、〔十三〕第381～424行、〔十四〕第425～464行、〔十五〕第465～512行。

1. 菱山修三『若きパルク』昭和十七年。注なく、訳文のみ。
2. 田辺元『ヴァレリーの芸術哲学』第三章、昭和二十六年。論文中に「 」をつけて抄訳引用した部分。後に『田辺元全集』第十三巻に収めた。
3. 矢内原伊作・原亨吉訳、アラン注釈『若きパルク』、昭和二十九年。訳者による原詩の「概要」の全文。脚注あり。
4. 鈴木信太郎「若きパルク」、現代世界文学全集『若きパルク・我がファウスト』昭和三十年。脚注あり。後の改訂版に『ヴァレリー全集』第1巻、岩波文庫『ヴァレリー詩集』などがある。引用は全集版によった。
5. 平井啓之「若いパルク」、『世界名詩集大成4』昭和三十七年。後注あり。後の改訂訳『世界名詩集17』昭和四十二年、『世界詩人全集10』昭和四十四年では脚注。引用は全集版によった。
6. 井沢義雄「若きパルク」、『ヴァレリー詩集』昭和三十九年。訳文のみ。後の改訂訳『ヴァレリーの詩 若きパルク』昭和四十八年には詳しい注釈がある。改訂訳によった。
7. 中井久夫『若きパルク/魅惑』一九九五年。注釈あり。引用は二〇〇三年の改訂普及版によった。

〔五〕

102-103

HARMONIEUSE MOI, différente d'un songe, /Femme flexible et ferme aux silences suivis

菱山：夢とはまた別な、諧調ある私よ、／かずかずの純粹きよらかな仕種に伴ふしづけさに、しなやかに動く、すこやかな女人よ！……

田辺：「幻影と異なる調和的自己が、沈黙に続く純粹行為の主たる、しなやかにして丈夫なる女」

矢内原：夢とは異なる調和ある我、声なく純粹な行為に移る、しなやかにして堅固な女人よ！……

鈴木：夢のわれとは異なる自我よ、諧調的なる『自己』よ、／純粹行為を沈黙の後に続ける 柔軟にして堅固なる

平井：夢とは別の、調和にみちた自我、／柔軟でしっかりして、黙って純粹行為を果す女……

井沢：まぼろしの夢とは別の、諧調も妙なるわれよ、／純き行為わづつづく静謐しじまの撓なみやかなの堅固そみなの女！……

中井：諧調の「われ」。夢とは別の、しなやかに、しっかりと、しじまの女、／沈黙には直ちに純粹行為が続いて！

104-105

D'actes purs!... Front limpide, et par ondes ravis, /Si loin que le vent vague et velu les achève,

菱山：透明な額よ、またその仕種は波々に乗って嬉々として、／遙か遠くまで、定まりない轟立つ風もその純粹な仕種を搬び去る、

田辺：「額は輝き、浪に心奪はれ恍惚として、変り易く乱れ勝なる風が浪を食ひ尽すはてまで、

矢内原：白暫の額よ、また波の如く吹きやられ、臍へらろにそばだつ風がその波の端に到るほど遥かに吹き、

鈴木：女性よ…… 清く澄みたる額よ、軽らかなの長き髪よ、／うねうねと波に揺られて、漠々と轟立つ風の波を鎮むる

平井：澄んだ額、そして波のようにうねり、／茫洋とした轟立つ海の風にはるかに吹きなびき、

井沢：澄みわたる額よ、さては波のごと吹きさらはれて、／臍へらろなる轟立つ風びふうにいかにも遠くうち遣らるとも、

中井：晴れ渡る額、軽やかな髪、波に酔ひ、遠くに靡き、／天鷲てんじゆ絨の微風の気まぐれに一度は鎮まるが、

106-107

Longs brins légers qu'au large un vol mêle et soulève, /Dites!... J'étais l'égale et l'épouse du jour,

菱山：沖合へ、一飛翔が、混ぜ合せ吹き上げる、丈長いかろやかな早苗のかずかず、／云へ！……全能のいみじくも高い天空に

田辺：吹上ぐる風に広く混ぜ合はされ吹上げらるる軽き長き芽生の如き肢体もちて、言へ、われは崇むる全能の高みに、

矢内原：一つの飛翔がひろやかにまぜあはせ吹きあげる丈長く軽やかな葉よ。言へ…… 尊い全能の天空に

鈴木：遥かなる沖つ方に吹き柔し吹き靡かする早苗なす髪よ、／言へ…… 礼拝する全能の天の高さに、

平井：沖の方へもつれひるがえりながら飛ぶ若草の髪よ、／言っておくれ……私は太陽と並ぶその妻であったと、

井沢：飛翔ひとつ混ぜて吹きあぐ軽やかなの長き早苗よ、／言へ！……われは、われが崇むる全能の高きところに

中井：沖の疾風の一吹きに丈高い若草は纏れて、また舞ひ揚がるのであった。／さう！……私は陽と肩を並べる、陽の連れ合ひ、

108-109

Seul support souriant que je formais d'amour /A la toute-puissante altitude adorée...

菱山：私が愛いづくしみ情を以て生み出した頬笑ましい唯一の支柱、太陽に／私は比肩するもの、またその配偶者であったと……

田辺：愛もてわが築けるほほゑめる支柱、太陽の同輩にして配偶者なりきと。」

矢内原：私が愛しみをもつて造り成した微笑む唯一の支柱、太陽に私は比肩するもの、その配偶者であったと……

鈴木：微笑しつつ、愛をもて形かたちづく成りし唯一の人像カリアチド柱、／このわれは 太陽と対等のもの、その妻なりきと……

平井：あこがれの的である全能の天の高みに、／愛をもって自ら築いた微笑む一個の支柱であったと……

井沢：愛もちてわが造りし笑みわたる唯一の支柱、／太陽に比肩するもの、またかれが配偶なりき……

中井：微笑みつつ全能の天を唯独り愛によって創り、／支へ、崇めてゐた柱であった……

110-111

Quel éclat sur mes cils aveuglement dorée, / Ô paupières qu'opprime une nuit de trésor,

菱山：眼を閉ざして黄金色に、かすかすの私の睫毛の上になんといふ光芒、／おお 宝の闇の押し寄せる両の
目蓋、

田辺：「われ何たる光に、盲目的にまでわが睫を照らされ、瞼は宝の夜暗に圧迫せられて、

矢内原：宝の夜の重みに重い瞼よ、眩むばかり金色に彩られて

鈴木：睫毛の上に金色に 眼は閉せども彩られ、何たる光輝、／おお燦ける財宝の夜の圧迫する 瞼よ、

平井：眼も眩むばかりにまづげには金色の光をうけて、／おお宝にみちた闇夜が押しふたげる瞼よ、

井沢：いかにこの睫毛の輝り、眩むまで黄金に染みて／われは、おお宝の夜の庄しかかる双の眼瞼よ、

中井：光の、何といふ、睫毛の上の炸裂であったか、／目の見えなくなるまで金に満たされ、

112-113

Je priais à tâtons dans vos ténèbres d'or! / Poreuse à l'éternel qui me semblait m'enclorre,

菱山：私はその黄金の闇のなかで手探りながら祈願してゐた！／私を閉ち籠めるやうに思はれる神に対して間
隙のあるまま、

田辺：その金色の影なる闇にたどきもしらず祈りしよ。われはわれを包むごとく見ゆる永遠に身を曝して、

矢内原：私は、お前の黄金の闇の中に手探りしながら、私の睫毛の上の何といふ光に祈つてゐたことか！ 私
を閉ちこめてゐると思はれた永遠を吸ひながら、

鈴木：われは 瞼の黄金の闇夜の中に 手探りに祈願しむたりき。／わが身を裡に閉ち籠めし永遠を 吸収す
る粗鬆の女、

平井：私はその金色の闇の裡に手さぐりで祈った。／身を包みこむような永劫に、総身の気孔を開いて、

井沢：汝が黄金の闇のものなかに手探りに祈りてぞゐし！／このわれを包むと見えし永遠に身は滲まれつつ、

中井：宝輝く夜に瞼は気押されて、その黄金の闇を手探りしつつ／私は祈ってゐた！ 私を裏むかに見える永
遠に私のあらゆる孔を涵されて、

114-115

Je m'offrais dans mon fruit de velours qu'il dévore; / Rien ne me murmurait qu'un désir de mourir

菱山：私は身を晒してゐた、神の貪り食ふ天鵞絨の私の果実のなかに。／なにももの私に囁いてはゐなかつた

田辺：その永遠の呑み込むわがやはらかき肉体を犠牲に献げたり、この亜麻色の肉の中に、死なんと欲する望
みの

矢内原：私は私の天鵞絨の果実の中、永遠が貪り食ふこの果実の中に身をさし出してゐた。何もの私に囁き
はしなかつた、

鈴木：われは身を 永遠の貪り喰ふ天鵞絨の果実の中に 献げたり。／其時、死する欲望が この太陽に輝け
る黄金色の果肉の中に

平井：私はその永劫が貪り喰うピロードの果実となって身をささげた。／陽に光るこの金色の肉体のうちに死
へのねがいが

井沢：かれ啖らふびろうどの実のなかにわれは身を曝しむき。／囁きて告げ来るものはあらざりき、死のあこ
がれの

中井：天鵞絨の和毛の果物の中の私は、貪り食らふこのものに身を捧げた。／陽の光を受けた亜麻色の果物の
肉の中に

116-117

Dans cette blonde pulpe au soleil pût mûrir: / Mon amère saveur ne m'était point venue.

菱山：日当りにこの亜麻色の果肉のなかで死の願ひが熟し出す懼れあることを。／苦々しい己が風味はいささ
かも私を見舞つてはゐなかつた。

田辺：陽光に熟することを、われに囁けるものは何もあらざりき。わが苦渋の味は未だわれに来らざりしなり。」
 矢内原：このブロンドの果肉の中に死の願ひが、日に照らされて熟し得ようとは。私の苦い味はまだ少しもあらはれてゐなかつた。

鈴木：恐らく熟し得たりとは、何物も終ひに囁きしものなかりき。／わがにがき苦悩の味は 未だ到来せざりしなり。

平井：熟し得ようなどと、私にささやくものはなかつた。／苦渋の味わいは未だ私を訪れたことはなかつた。

井沢：ブロンドのこの果肉のなか陽あたりに熟しえんとは。／わが苦き風味はいまだこのわれを訪はざりしなり。

中井：死への憧れが育つてゐやうとは——微かな囁きもなかつた。／舌はまだ苦い前味を知らなかつた。

118-119

Je ne sacrifiais que mon épaule nue /À la lumière; et sur cette gorge de miel,

菱山：私は光に裸形の私の肩のみを犠牲に供してゐた。／そして、その優しい生誕が天空を完成しながら、

田辺：「われはわが露出せる肩のみを光に献げたるなり。そのやさしき誕生もて天を完くせる

矢内原：私が光に献げたのはただ露はな肩だけであつた。そしてこの蜜の乳房の

鈴木：日光の犠牲にわれは 裸出せるわが肩のみを献げたり。／しかもこの蜜を含めるふくよかの女の胸の

平井：私はただあらわな肩をささげていた／陽の光に。そして蜜を秘めたこの胸は、

井沢：あまねくも満つる光に贅としてわが捧げしは／素裸なる肩のみなりき。さはれこの蜜の胸乳の

中井：ただ露はな肩を光に捧げ、／蜜色の胸の膨らみが優しく現れ出た時、

120-121

Dont la tendre naissance accomplissait le ciel, /Se venait assoupir la figure du monde.

菱山：この蜜の胸の上に、／世界の顔が微睡に來てゐた。

田辺：この蜜の喉の上に宇宙の姿まどろみに來れり。

矢内原：優しい誕生が天空を完成し、世界の姿はその上にまどろみにやつてきた。

鈴木：柔かに形成されて天空の無凝の円味を生み出せし／胸の上には、世界の形態は微睡に訪れたりき。

平井：そのやさしい誕生によって円満具足の天を現じて、／その上には世界の像もまどろみに來るのであつた。

井沢：優しくも美しき生誕、天空を現成しつつ、／そがうへに世界の姿は訪れてまどろみありき。

中井：その現れに天は全たきものとなつて、／そこに世界の像は來て微睡むのであつた。

122-123

Puis dans le dieu brillant, captive vagabonde, /Je m'ébranlais brûlante et foulais le sol plein,

菱山：次いで、耀かしい聖体のなかで、さまよふ楚囚の女人、／私は、燃えるやうな我が身を徐ろに起し、まどかな土壤を踏みしめてゐた、

田辺：次にわれは、輝ける日神の体内にさまよふ放浪の俘囚として、燃えつつ揺れ、大地を踏みしめて、

矢内原：それから、輝く神の中に、虜はれの放浪者である私は燃える体を揺すり、充実した大地を踏みしめてゐた、

鈴木：やがて、燦やく神の中に、さまよひ歩く 捕はれの女人のわれは、／わが諸々の幻影を 輕羅の下に結びつつ又解きほぐしつつ、

平井：やがて光りかがやく神の世界に、さまよう囚われの女となり、／私は燃えつつよろめき、ゆたかな大地を踏みしめて、

井沢：さてついで、日の神のなか、さすらひの虜囚のわれは、／燃ゆる身を揺り、充実の大地をば踏みしめてゐるき、

中井：さて、流離ふ私は輝く神に囚はれて／亜麻布の下のおのが影をかつ結び、かつは解きつつ、

124-125

Liant et déliant mes ombres sous le lin. /Heureuse! A la hauteur de tant de gerbes belles,

菱山：りんねるの下にかずかずの私の影を結びまた解きながら。／幸福な女人！ ありあまる美事な莖束と高さを競ひ、

田辺：わが幽影を麻布の下に繋ぎまた解く。幸福なるかな、われ、かばかりの美しき束の高さまで、
 矢内原：リンネルの下に私の影を結びまた解きながら。幸福な者よ！ お前は、美しい草の夥しい繁みと高さ
 を競ひながら、
 鈴木：炎ゆるが如くゆらめきて、豊饒の大地を踏みて彷徨したり。／幸福なる女よ。われは、高々とかくも茂
 れる 美しき花
 平井：薄衣の下わが形影を結びつ解きつした。／幸せな女。身丈にもおよぶうつくしい花野を行けば、
 井沢：リンネルの下わが形影を結びつつ、かつは解きつつ。／幸福の女や！ 美しきあまた束と高さ競ひて、
 中井：燃え盛る己を揺すって確かな大地を踏みしめてゐた。／幸せな女であった！……私が衣を身の丈の高さ
 の草に打たせる時、

126-127

Qui laissait à ma robe obéir les ombelles, / Dans les abaissements de leur frêle fierté;

菱山：私はまかしてゐた、私の長衣に、かすかすの繖形花が／そのか弱い誇りを失ひながら屈するがままに。
 田辺：わが衣服のまにまに繖形花を従はせ、その花の脆き誇りを屈従に委ねたるは。
 矢内原：繖形花をしてそのか弱い誇りを屈して私の衣に従はせてゐた。
 鈴木：踏みしだき、花は そのしなやかなる矜持をわれに屈従させて、／わが長衣には 点々と花冠花卉を附
 著せり。
 平井：花々は私の裳裾にひかれて花冠をかたむけ、／たおやかでしかもほこりかなその身をなびかせた。
 井沢：このわれは繖形花らをわが衣に従はせるき、／花々はかれがあえかに誇らしき頭を屈しつつ。
 中井：末広りの美しい花は儂い誇りを捨てて、／次々に身をかがめるのであった。

128-129

Et si, contre le fil de cette liberté, / Si la robe s'arrache à la rebelle ronce,

菱山：しかし、この自由の道行の糸筋に逆らつて、／よし長衣は謀反気の茨にさらはれるとしても、
 田辺：若しこの自由の糸に背きて衣服が反抗の茨より挽ぎ去らるるならば、
 矢内原：そして、もしもその自由の糸に抗つて、もしも衣が謀叛する茨から引離される時には、
 鈴木：若しも時に、この自由の道の糸筋に敢へて逆らひ、／若しわが長衣の 茨にさらはれ挽ぎ取られむとす
 る時は、
 平井：そしてもしも、この自由の絆に抗つて、／私の服が意のままにならない荆棘に引きむしられると、
 井沢：さはれこのわれが自由の糸すぢにもし逆らひて、／反抗の茨の棘よりわがころも剥がされんとき、
 中井：だが、この自由の糸の流れに逆らつて／茨の棘が衣を引き離すならば

130-131

L'arc de mon brusque corps s'accuse et me prononce, / Nu sous le voile enflé de vivantes couleurs

菱山：花々の長い紐に私の種族が競ふ／生々しいとりどりの色を誇る被布の下に、素裸かに、
 田辺：わが暴々しき身体の弧は、わが種族が花の長き繋がりにも挑み競ふ
 矢内原：あらあらしい私の肉体の弓があらはれ、私の存在をうち出す、私の血統が長く連り咲く花々とその色
 を競ふ
 鈴木：わが肉体は、忽ちに弧を描き 力を籠めて鮮明に己を表し、／長き茎を飾れる花と、妍を競ひて、その
 生々と
 平井：私の身の弧線は急にくっきりとその姿をあらわす、／長い茎の花々と妍を競いながら
 井沢：唐突の身体の弓はおのれ出て、われを宣示す、／花々のながき絆とわが族のたがひに競ふ
 中井：身体は俄かに弓となつて一糸纏はぬ無垢の姿を誇らかに示すだらう、／人の子が長い花綵と生命の色を
 競つて

132

Que dispute ma race aux longs liens de fleurs!

菱山：粗々しい私の肉体の弓は、自らをあらはにし、私に決意の程を示す！
 田辺：生々しき諸色にふくれかへる被布の下、裸身にてみづからをあらはし、われに罪を宣す。」

矢内原：生き身の色に膨むヴェールの下に、露はに！

鈴木：鮮やかな色彩をもて、盛り上る被布の下に、^{ヴェール}裸なり。

平井：その裸形を色あざやかな風にふくらむヴェールにつつんで。

井沢：生色に満ちて膨らむ^{きぬ}衣の下、いとも露はに！

中井：膨らむ薄絹の、その下に！

133-134

Je regrette à demi cette vaine puissance... /Une avec le désir, je fus l'obéissance

菱山：私はこの空しい権勢を半ば口惜しく思ふ……／あの欲望と一つになり、私は、この艶やかな膝がしらに
従いてゆく、

田辺：「われはこの空しき勢力を半ば悔恨す。われは慾情と一体にて、このつややかなる膝に

矢内原：私はあの空しい力を半ば懐しむ…… 欲望と一つになり、この滑かな膝に結ばれて、

鈴木：嘗ての空虚なる力を 半ば 名残惜しと思ふ……／意欲と一心同体のわれは、この滑らかなる諸膝に

平井：私には半ばあの頃のむなしい力がなつかしまれる……／欲望と一体であった私は、ただちに欲望のまま
に従った、

井沢：詮もなきこの権勢をわれは半ばなつかしむかな……／欲望とわが身はひとつ、滑らかなこのもろ膝に

中井：幾許かは心の残る、虚しかった、あの気負ひ……／滑らかな膝の動きのままに

135-136

Imminente, attachée à ces genoux polis; /De mouvements si prompts mes vœux étaient remplis

菱山：すぐ意のままになる柔順さだった。／かずかずの私の冀願は迅やかな動作で果されてゐる、

田辺：密着し服従に急なりき。かくも素早き運動にわが願望は満たさるるを以て、

矢内原：私は直ちに従ふ従順そのものであった。いとも迅かな動きによつて私の希ひは直ちに満たされた、

鈴木：結ばれて、音に響の応ずる如く、意欲にそのまま従順なりき。／わが願望は 忽ちに動作となりて満た
されて、迅速なること

平井：このつややかな膝に結ばれて。／心のねがいはきわめて速かに動作となり

井沢：結ばれて、われすなはちに身はなびく服従なりき。／わが冀^{こひ}はいと迅やかな身ごなしによりて満され、

中井：私は意志と一体になり素直そのものであった。／心に願へば忽ち身体が応へ、

137-138

Que je sentais ma cause à peine plus agile! /Vers mes sens lumineux nageait ma blonde argile,

菱山：私の原因、私の意思が辛うじてその動作よりもなほ速いかと思はれるくらゐ迅やかに！／光を放つ私の
感覚の方へ、亜麻色の私の粘土質の肉体は遊泳し、

田辺：われはわが訴因陳述の殆どこれより速ならぬを感じたり。わが明るき感覚に向ひわが亜麻色の肉体は泳
げり。

矢内原：私の意志もそれより速いとは思へぬほどに！ 光を放つ私の感覚の方へと私のブロンドの体は泳いで
行つた。

鈴木：辛じて 自己の起因に応じしを 感じ得たりし如くなり。／わが黄金色の肉体は 光輝く感覚に向ひて
流れ、

平井：わが心の訴えもわずかに先んずるばかりと思われた。／黄金色の肉体は光にみちた官能に向つて泳いで
行き、

井沢：ためにわが意志もかくまで敏しとも思はれざりき！／光はなつ感覚のかたブロンドの粘土は泳ぎ、

中井：思ひの湧くよりも早いと思はれた！／亜麻色の土くれの身体は輝く感覚に向つて泳いで行つた。

139-140

Et dans l'ardente paix des songes naturels, /Tous ces pas infinis me semblaient éternels.

菱山：自然な夢の火のやうな平和さのなかで、／この無限の歩みはあげて永遠なものやうに私には思はれた。

田辺：しかして自然の夢の燃ゆる静けさのうちに、この限なき歩みの全体はわれに永遠の如く思はれつ。

矢内原：そして生来の夢の燃える平和の中で、これらの無限の歩みほすべて永遠のものと思はれた。

鈴木：自然の夢の熱烈に燃ゆるが如き平安の中に、あらゆる／無限なるこれらの歩みは 永遠と思はれたりき。

平井：自然の夢の灼熱のやすらぎのさ中において／その果てしない歩みは、私には久遠のものと思われた。

井沢：すずるなる現の夢の灼熱の平和のなかに、／果てもなき歩みはあげて永遠のものと思はれき。

中井：この自然の夢の灼熱の平和の中の／果てしない歩みは悉く永遠かと思はれた。

141-142

Si ce n'est, ô Splendeur, qu'à mes pieds l'ennemie, /Mon ombre! la mobile et la souple momie,

菱山：おお 壮麗さ、私の影も、私の足許でなければ仇敵でないとは！／私の色どられた不在の、柔軟な動く
木乃伊、この私の影は、

田辺：おお光、若しわが足もとの敵、わが影さへあらざりせば……動き易くしなやかなる《みいら》は、

矢内原：ただ、ああ〈輝き〉よ、私の足許の敵、私の影さへなかつたならば！ よく動くしなやかな木乃伊は、

鈴木：然るに、光輝よ、わが足もとに落す影は 仇敵のみに／過ぎずとせば、おおわが影よ、柔軟なる 動く
木乃伊、

平井：おおかがやきよ、私の足下で、仇敵にすぎないのか、／わが身の影は。なめらかに動く木乃伊は、

井沢：さはれただ、おお光耀よ、これやわが足もとの敵、／わが影や！ このうつろひも撓やかな動く木乃伊
は、

中井：ただ、「輝き」よ、足元に「敵」が！／私の影！ 影はしなやかな動く木乃伊、

143-144

De mon absence peinte effleurait sans effort /La terre où je fuyais cette légère mort.

菱山：楽々と触れてゐた、／私がこのかるやかな死を遁れてゆく大地に。

田辺：わが不在によつて描かれつつ、わがこの軽やかなる死を避けたる土地に造作もなく触れ行きたり。

矢内原：私がこの軽やかな死を逃れて行く大地の上を、易易と、描かれた私の不在で触れて行つた。

鈴木：わが不在に彩られたる木乃伊の影は、やすやすと大地に触れぬ、／われのつとめて避けるたりし この
軽き死の観念を裏む大地に。

平井：私の不在に彩られて、無造作にかすめて行く、／私があゝの軽やかな死を逃れようとした大地を。

井沢：描かれしわが不在もて易々として地に触れゆけば、／そこにわれこの軽やかな死をば身は逃れゆきつつ。

中井：色美しいわが不在によって影は軽やかに黒土に触れ、／この束の間の死を私は逃れやうとしたが、

145-146

Entre la rose et moi, je la vois qui s'abrite; /Sur la poudre qui danse, elle glisse et n'irrite

菱山：薔薇と私との間に、私の影が隠れるのを私は見る。／また踊る塵埃の上に、その影は滑り、

田辺：われはそが、薔薇とわれとの間に身を隠したるを見る。そは舞ふ塵の上を滑りて

矢内原：薔薇と私との間に、それが忍びこむのを私は見る。踊る埃の上をそれは滑り、

鈴木：われは 薔薇とわが身の間、わが影の隠るを見る。／塵埃の踊れる上を わが影は滑りて、如何なる
繁りをも

平井：薔薇と私との間に、私の影法師が身をかくす。／踊る埃の上を、影はすべり行き、木の葉一枚みだすこ
ともなく、

井沢：薔薇とはたわれとのあひに、われは見る、かれの潜むを。／ほこり舞ふ上をわが影すべりゆき、葉ごも
り一つ

中井：薔薇と私との間に影が隠れるのが見え、／影は舞ひ踊る塵の上を滑り、そよともさせずに

147-148

Nul feuillage, mais passe, et se brise partout... /Glisse! Barque funèbre...

菱山：どんな木の葉の繁みも苛立てずして、行き過ぎ、その至る処に碎け散る……／滑りゆけ！ 喪の小舟
よ……

田辺：葉も動かさず過ぎ去り、随所に碎くるなり。滑り行け喪の船よ。」

矢内原：しかも木の葉一つをもそよがさず、ただ通り、到るところに碎けて…… 滑り行け！ 不吉の舟よ……

鈴木：葉ずれの音なく通り過ぎ、到る所に 碎け散る……／滑り行け。喪の小舟よ……

平井：過ぎ行き、そしていたるところで砕けて散る……／すべり行け、不吉な舟よ……

井沢：揺がさず、通り過ぎつつ、はた到るところに砕け……／迂りゆけ！ 不吉の舟よ……

中井：茂みを通り抜けて、そこかしこに砕け散る……／いっそ滑り行け！ 魂送りの小舟！……

〔六〕

148-149

ET moi vive, debout, /Dure, et de mon néant secrètement armée,

菱山：そして私は生き生きと、立ちつくし、／頑に、ひそかに己が虚無で武装し、

田辺：「されど活けるわれは生き続く、わが空無によつてひそかに武装されながら、

矢内原：そして私は生きて、立ちあがり、身を固め、私の虚無で秘かに武装し、

鈴木：而してわれは生生と、身を硬ばらせ、／断乎と立つて、わが虚無によりて秘密に武装して、

平井：生身の私は立って、身を硬ばらせて、／秘かにわが虚無で心の武装を固め、

井沢：してわれは、生き生きと、立ち、／頑なに、わが虚無もちて密やかに身をうち鎧ひ、

中井：だが、私は生命に溢れ、すくと立ち、／身を引き締め、密かにわが虚無によって鎧ひつつも、

150-151

Mais, comme par l'amour une joue enflammée, /Et la narine jointe au vent de l'oranger,

菱山：しかも、まるで恋情で燃えたやうな頬をして、／鼻腔はおれんぢの樹の風に交はり、

田辺：あたかも恋情によるがごと片頬をほてらせ、オレンジの香り高き風に鼻孔を接して、

矢内原：しかしまた愛のためであるかのやうに頬を火照らせ、またオレンジの風に鼻をひたとあてながら、

鈴木：恰も恋に炎ゆる如く 片頬を赤くほてらせ、／香橙の林を縫へる薫風に 鼻膨らませ、

平井：しかも愛で染められたように頬をほてらせて、／また鼻孔にはオレンジの香に匂う風を吸いながら、

井沢：さりながら、恋の思ひに燃ゆるごと頬をほてらせ、／オレンジの樹立をわたり吹く風に鼻ひたとあて、

中井：愛によるかのごとくに片頬を焰の色に染め、／オレンジの木立の風に鼻の孔を合はせ、

152-153

Je ne rends plus au jour qu'un regard étranger... /Oh! combien peut grandir dans ma nuit curieuse

菱山：もはや太陽に、よそよそしい眼差ししか返さぬ……／おお！ 如何ばかり大きくなり得ることか、私の稀有の夜のなかで、

田辺：われはもはや白日に向ひよそよそしき眼差を返すのみ……おおいばかり、わが離背せる胸の神秘なる部分が

矢内原：もはや太陽に向つてはよそよそしい視線しか向けぬ……ああ！ 何と大きくなり得ることか、私の不思議な夜の中で

鈴木：われは今 太陽に向ひて無縁の眼差しを ただ返すのみ……／おお、わが分離せられたる心の中の神秘なる

平井：もはや太陽にはよそよそしい眼差を返すに過ぎない……／おお好奇心にみちたわが夜の裡には、

井沢：われはもはや陽には返さず、よそよそしき眼差のほかは……／おお！ いかになが珍らかの夜のなか生ひまさるかな、

中井：陽にはもはや白い眼を返すのみである……／心から分れた神秘の部分は未知を求めて

154-155

De mon cœur séparé la part mystérieuse, /Et de sombres essais s'approfondir mon art!...

菱山：離反した私の内心の不可解な部分が、／そしてまた私の業が、不安な試みで、如何ばかり深くなり得ることか！

田辺：不思議なる夜の中に増大し、また幽暗の試みによりわが芸術は深まることか。

矢内原：切り離された私の心の神秘な部分が、また暗い試みにより私の術の何と深まり得ることか！……

鈴木：部分は 如何に 奇怪なるわが夜の中に 拡大し、／またその暗き試みに 意識の業は如何ばかり 深まり得るか……

平井：如何ばかり私の孤独な心の神秘な部分が拡がり、／また暗いころみの私の技巧が深まることか……

井沢：裂かれたるわれが心のなかにこの奇しき部分^{ところ}は、／はた暗き試みいくつにわが術^{わざ}は深まさるかな！……
 中井：わが好奇の夜に伸びに伸び、／暗闇を探る試みを重ねてわが技の巧みはいよよ高まる！……
 156-157

Loin des purs environs, je suis captive, et par /L'évanouissement d'arômes abattue,
 菱山：純粋な周囲のものから遠く、私は楚囚^{とらはれ}の身となり、／香気の喪失に打ち拉がれて、
 田辺：純粋なる周囲より遠く離るれどわれは俘囚^{とらはれ}なり、たちのぼる芳香に打たれて、
 矢内原：純粋の境を遠く離れ、私は虜はれの身、そしてかぐはしい匂の消滅によつて打ちめされ、
 鈴木：かくて純粋なる周囲より遠く離れて、われは虜囚^{とらはれ}の身となりて、／芳香も 風に浚はれ消え失せて 落
 寞として、
 平井：清澄な周囲から遠く離れて、私は囚われの女であった、／馥郁とした空気ももはや覚えず打ちしおれて、
 井沢：純らかの四周^{ほとり}をとほく、このわれは虜囚^{とらはれ}にして、／芳はしき香のうつろひにこれやこの身は挫がれて、
 中井：めぐる景色を遠く離れて、われは囚はれの身、／薫りは消えて、ために力萎え、
 158-159

Je sens sous les rayons, frissonner ma statue, /Des caprices de l'or, son marbre parcouru.
 菱山：私は感じる、日差しの下で、私の立姿が身慄ひするのを、／黄金色の気紛れの馳せめぐる、その大理石^{なめいし}
 が身慄ひするのを。
 田辺：われは光の下にわが身体^{からだ}のふるへ、黄金のきらめき身内にゆきわたるを感ず。
 矢内原：私は感ずる、私の立像が光の下に戦き、その大理石に移り気な黄金の光が走りめぐるのを。
 鈴木：燦々たる光の下に わが肉体の立像は、その大理石^{なめいし}を／黄金の気紛れに降りそそがれて、戦慄するをわ
 れは感ず。
 平井：私は陽光を浴びながら感じていた、わが像^{すがた}のおののきを、／その大理石^{なめいし}にきまぐれな金の光をつたわせ
 ながら。
 井沢：われは覚ゆ、光のしたにわが像の顛へそよぐを、／金色の陽の気紛れは大理石^{なめいし}を馳せ巡りつつ。
 中井：陽の光の降り注ぐ下でわが彫像の震へを感じ、／陽の金色の気まぐれがその大理石^{なめいし}の総身^{そうみ}を馳せ巡る。
 160-161

Mais je sais ce que voit mon regard disparu; /Mon œil noir est le seuil d'infemales demeures!
 菱山：しかし、隠れた私の眼差しの見てるものを、私は知つてゐる、／黝^{かぐろ}い私の眼は、かずつの地獄の棲
 家の、敷居なのだ！
 田辺：されどわれはわが消えたる眼差しの見るものを知る、わが黒き眼は地獄の入口なり、
 矢内原：しかし私は消え失せた私のまなざしが何を見るかを知つてゐる。私の黒い眼は地獄の家々の入口なの
 だ！
 鈴木：さりながら、閉ぢられしわが視線の見たるものを知る。／わが黒き眼は 地獄なる住家をへだつる鬨な
 り。
 平井：だが私は知っている、私の消えた眼差が何を見ているかを。／暗黒のわが眼は奈落の世界の入口なのだ。
 井沢：さはれわが消えし眼差の見るものをわれこそは知れ。／かぐろなるわが眼は奈落なる地獄の敷居！
 中井：見ることをやめても見たものは消えない。／黒い眼は地獄の住ひの敷居である！
 162-163

Je pense, abandonnant à la brise les heures /Et l'âme sans retour des arbustes amers,
 菱山：私は考へる、微風に時間をまかせ、／魂は苦々しいささやかな灌木から立ち返らぬままに、
 田辺：われは思ふ、時間を微風の吹き運ぶにまかせ、魂が苦渋の灌木叢より帰ることなきままにまかせて。
 矢内原：私は想ふ、そよ吹く風に時間をまかせ、また若い繁みの帰つてこない魂をまかせ、
 鈴木：われは思考す、時の歩みを微風^{そよかせ}の運ぶにまかせ、／靈魂^{たましひ}を 苦き薫の灌木の林の中に 還らぬままに打
 棄てて、
 平井：私は思う、微風^{そよかせ}に、時の歩みを、／また苦い灌木の立ち返ることもない息吹をまかせて、
 井沢：われは思ふ、そよ吹く風にそこばくの時間をゆだね、／魂は苦き茂みに立ち迷ひ帰り来ぬまま、

中井：過ぎ行く時の刻みを微風^{そよかぜ}に委ね、／還らざる生命の息吹きを早潮の飛沫^{しぶ}きに委ねつつ、
164-165

Je pense, sur le bord doré de l'univers, /A ce goût de périr qui prend la Pythonisse

菱山：私は考へる、宇宙の黄金色の周辺の上で、／その内部で世界終焉の希望が吠え猛る

田辺：われは思ふ、宇宙の金色なる周辺を眼下に瞰^み、この死にあこがるる嗜好を。この嗜好の動きては古代の
ピュトニス巫女も、

矢内原：私は想ふ、宇宙の金色の縁で、胸の中に世界消滅の望みが吠え猛つてゐる

鈴木：宇宙の金に塗られたる周辺の境に立つて、／その内心に世界の破滅を希望して呻きをあぐる予言の巫女

平井：私は思う、宇宙の金色の岸边に立つて、／占筮^{ピトニス}巫女をとらえたあの滅びをもとめる気持を、

井沢：われは思ふ、黄金に映ゆる宇宙^{あめつち}のこの周辺に、／胸ぬちに世の終焉の望み吼ゆる予言の巫女の

中井：宇宙の果ての金色の岸べに立つて、／わが思ひは向ふ、ピトニスの巫女を捉へる破滅の嗜好に、
166-167

En qui mugit l'espoir que le monde finisse. /Je renouvelle en moi mes énigmes, mes dieux,

菱山：あぼろの巫女を捉へるこの破滅の嗜好を。／私は自らの裡で一新する、私の謎のかずかずを、私の神々
を、

田辺：世界の終末を望む願の、心中にうめくを聴けるなり。われは、わがうちにわが謎を、わが神々を、一新
す、

矢内原：ピトニスを執へるあの死の希ひを。私は私のうちに、私の謎、私の神々を繰返し新たにし、

鈴木：ピトニスを 捉へてやまぬ死する嗜好を われは思考す。／われは わが内心に、わが謎を わが神々
を更新し、

平井：巫女の身内には世界の終焉のねがいが呻吟していた。／私は新しくする、心内のわが謎を、わが神々を、

井沢：ピトニスの身をば捉ふる、かの死への希ひのことを。／わがうちにわれは繰りかへす、わが謎を、わが
神々を、

中井：世の終りを願っておらびさせる破滅の嗜好に。／わが裡に常に革まるわが謎、わが神々、

168-169

Mes pas interrompus de paroles aux cieux, /Mes pauses, sur le pied portant la rêverie,

菱山：天空へ語るかずかずの言葉で中絶した私の歩みを、私の休止を、／翼の羽の斑紋で様々に変る鳥に随ふ

田辺：また天に祈る言葉に遮らるるわが歩みを、夢想を運ぶ足にたゆたふわが休止を。

矢内原：天への祈りに途絶える私の歩み、また足さきに夢をのせた私の停止を繰返す。

鈴木：九天に語る言葉に 幾度か中断せらるるわが歩みを、／夢想を運ぶ足の上に わが休息を、更新す。

平井：天に向っての言葉に中断されるわが歩みを、／また夢想を運ぶわが足の上の、わが休息を。

井沢：天空へ投ぐる言葉にうち絶ゆるわれが歩みを、／さてはまた夢はこびゆく足のうへのわれが休止を。

中井：神々に語りかけては停るわが言葉の歩み、／夢が歩みを捉へる時の心の途切れ。

170-171

Qui suit au miroir d'aile un oiseau qui varie, /Cent fois sur le soleil joue avec le néant,

菱山：夢想を搬ぶ足の上で。／また百度太陽の上で虚無と戯れながら、

田辺：その夢想こそは翼の反射にて飛ぶにつれ姿態の変る鳥を追跡し、陽光に百倍もまさる光の戯れを虚無も
て遂行す、

矢内原：その私の夢は翼を鏡と光らせて移りゆく鳥を追ひ、太陽の上で幾度も虚無と戯れ、

鈴木：その夢想こそ 鏡の繙に 小鳥を追ひ落す什掛けにて、／小鳥は 変化し、百たびも太陽の反射に虚無
と戯れて、

平井：私の夢想はきらめく翼のままに変転する鳥影を追ひ、／鳥影は百度も太陽の面上で虚無とたわむれて、

井沢：その夢は翼の鏡に変わりゆく鳥ひとつ追ひ、／高ひかる太陽のうへ百たびも虚無とたはむれ、

中井：夢は追ふ、翼の鏡を頼りにしつつ、形を変へて飛び行く一羽の鳥を。／夢は陽の光の上で百千度^{ももちたび}虚無と
戯れ、

172

Et brûle, au sombre but de mon marbre béant.

菱山：私は燃え上る、裂けて口を開いた私の大理石の、不安な目的のために。

田辺：かくしてわれは、わがゆるみたる身体の暗き標的に向ひて、燃ゆるなり」

矢内原：そして私の裂けた大理石の暗い目的に燃えるのだ。

鈴木：終ひに わが呆然たる大理石の暗き目的に 炎えて飛び入る。

平井：やがて燃える、口を開けているわが大理石の暗いゴールに向って。

井沢：口あきしわが大理石のいや暗き^ま目的に燃え入る。中井：燃えて、わが大理石の大口開けて待つ暗い^ま的に当る。

〔七〕

173

O DANGEREUSEMENT de son regard la proie!

菱山：おお 危くその眼差しの餌食となるところ！

田辺：「この死にあこがるる生の倦怠の注視の餌食となるぞ危き。

矢内原：ああ、危ふくも自らのまなざしに虜はれて！

鈴木：おお 危くも 将にその視線の餌食と成らむとす。

平井：おおあやうくも私はその眼差の餌食となるところであった。

井沢：危くもかれが黝ろの眼差の餌となるところ！

中井：危ふくも夢の眼差の餌食となるところ！

174-175

Car l'œil spirituel sur ses plages de soie /Avait déjà vu luire et pâlir trop de jours

菱山：霊妙な眼は、その絹の邦々の上に、／ありあまる日々が耀きまた蒼褪めるのを既に見てゐたから。

田辺：精神の眼はすでに、この倦怠の絹の砂浜の上に、あまりにも多くの日々の輝きてはまた薄るるを見たり、

矢内原：なぜなら、心の眼はその絹の岸辺の上に余りにも多くの日々が輝き出、また蒼ざめるのを既に見て居り、

鈴木：そのゆゑは 精神の眼は その絹の浜辺の上に、／夥多なる日々が輝きて またうすれ行く有様を 既に眺めて、

平井：なぜなら心の眼はその絹の浜辺にすでに／あまりにも多くの日々がかがやきまた蒼ざめるのを見てしまい、

井沢：そのゆゑは、精神の眼は和絹^{やはきぬ}のおのが岸辺に、／わがかねて色と流れをわれが身に予言したりし

中井：精神の眼は既にその絹の岸べにあって、／余りに多くの日の輝き翳りを見てしまった。

176-177

Dont je m'étais prédit les couleurs et le cours. /L'ennui, le clair ennui de mirer leur nuance,

菱山：その日々のかずかずの綾と流れとは、私が自らに予告してゐたもの。／その綾と流れの陰影を羨望する
明るい倦怠が、田辺：われにはその日々の色合も進路も予め知らる。倦怠、それらのものの色調を見据ゑることに厭きたる明
るき倦怠は、矢内原：その日々の色と流れとを私は自らに予言してゐたから。倦怠、それらの日々のニュアンスを見透すこ
の明晰の倦怠は、鈴木：その日々の色も経路も おのれに予言し居たるなり。／その陰翳を鏡の如く映し出す 明らか^{けだ}の倦怠は、
わが平井：私にはその日々の色どりも成り行きも予見できたのだから。／倦怠、日々の陰翳を鏡のように反映する
明晰な倦怠が、

井沢：あまた日の、輝きかつは褪めゆくをすでに見しゆゑ。／倦怠や、その色綾を見抜くこの明けき倦怠、

中井：日々の色も流れも予想に違はなかつた。／その色の移ろひを映す明晰^{けだ}な倦怠は

178-179

Me donnait sur ma vie une funeste avance: /L'aube me dévoilait tout le jour ennemi.

菱山：その倦怠が私に与へてゐた、私の生の上に早目な不吉な前進を。／夜明けは私に^{あば}発き出してゐた、仇をなす^{まる}全一日を。

田辺：わが生涯に対し不吉の予想を与ふ、暁は終日にわたり敵をほのめかす。

矢内原：私をして私の生命の上に忌はしい先廻りをなさしめた。夜明けは私に終日を敵としてあらはした。

鈴木：生命の上に 一つの不吉なる予告の価を払ひたり。／黎明は その一日の悉く敵なることを^{あか}啓したり。

平井：私の生活に不吉な予感を抱かせた。／暁は私に敵意にみちた一日の幕をひらいた、

井沢：凶しくもわが^{まが}生よりこのわれを先走らせて、／あけぼのは^{あだかたき}仇敵なるひねもすをわれに^{あば}発きぬ。

中井：生きの生命の果てを先取りして示した。／暁は薄絹を払って一と日の敵なるを明かした。

180-181

J'étais à demi morte; et peut-être, à demi /Immortelle, rêvant que le futur lui-même

菱山：私は半ば死せるもの、おそらくはまた半ば不死のものだつた、／未来とはそれ自ら

田辺：われは半ば死に、また恐らく半ば不死なるべし、未来そのものといへども、他のかばかり多きわが額の絶対なる火光の中にまじりて、

矢内原：私は半ば死んでゐた、そしてまた恐らくは半ば不死のものとして、夢みてゐた、未来そのものは

鈴木：われは 半ば死したる如く、又恐らく、半ば不滅の／神となり、夢みる夢は、未来とは わが額の絶対の火の

平井：私は半ば死んでいた、おそらく、半ば不死でもあったのだ、／未来でさえも運命の王冠を閉ざす

井沢：われは半ば身まかれるもの、おそらくは半ばは不死の／ものなりき、未来といふも他なしこれ、われが額の

中井：半ばは死に、おそらく半ばは不死となり、／未来は一粒のダイヤといふ夢を見た。

182-183

Ne fût qu'un diamant fermant le diadème /Où s'échange le froid des malheurs qui naissent

菱山：宝冠を閉ざす一個の金剛石に過ぎぬと夢みながら。／その宝冠には、私の額のありあまる別の絶対の火のなかに

田辺：生まれ来る不幸の冷たさのそこに交代し合ふ宝冠を統ぶる、ダイヤモンドに外ならずと想像すれば。」

矢内原：王冠を閉ざす金剛石にほかならず、私の額の他の多くの絶対の炎の間から生れるであらう冷い不幸がそこで入り混るのだ、と。

鈴木：輝ける間にありて 生れむとする不幸の冷たさが／交換されて 光を放つ王冠を 最後に鎖ざす金剛石の

平井：一個のダイヤにすぎないだろうと夢見ながら。／そこには私の額のおびただしい絶対の炎の間に生れ出る、

井沢：あまたなる他の絶対の火のあひに、やがて^あ生れ出ん／わざはひの不幸いくつの冷けさの^{やりとり}交換さるる、

中井：わが^{ぬか}額に燃える絶対の火のあはひに／生まれるだらう不幸の数々の冷えを伝へあふ

184

Parmi tant d'autres feux absolus de mon front.

菱山：やがて生じる重なる不幸の、冷やかさが取替はされるのだが。

田辺：〔前2行中ニ入ル〕

矢内原：〔前2行中ニ入ル〕

鈴木：一顆に およそ過ぎざるが 未来そのものにあらずやと。

平井：冷やかな不幸がごもごも席を占めに来るのだ。

井沢：王冠を閉ざす^{ダイヤ}金剛石にすぎざりと、われは夢みつつ。

中井：髪飾りの冠を完成する金剛石。

185-186

Osera-t-il, le Temps, de mes diverses tombes, /Ressusciter un soir favori des colombes,

菱山：あの「時間」は、進んで私のさまざまな墓穴から、蘇らしてくれるだらうか、／鳩等のいつくしむ夕を？

田辺：「時は敢て、わが様々の墓の中より、鳩達の好む夕を復活せしむるか、

矢内原：〈時間〉は、私の様々の墓の中から、白鳩の好む夕を蘇らせてはくれまいか。

鈴木：『時間』、敢へて時間は　さまざまのわが墓穴より、／群居る鳩の好もしきある夕暮の思出を　蘇らす
や、

平井：時間は、あえて、様々な追憶の墓地から、／鳩のよろこび集う、とある夕を蘇らせるのだらうか、

井沢：時間、そも時間は、われがとりどりの墓のなかより／あへてよく蘇らさんや、鳩いくつ恵まる夕を？

中井：いつかしてくれるのだらうか、「時間」は／様々の思ひ出を埋めた数々の墓穴に入って、

187-188

Un soir qui traîne au fil d'un lambeau voyageur /De ma docile enfance un reflet de rougeur,

菱山：音無しい私の子供の頃の、旅の断片の糸筋に／朱の日の照り返しを引いてゆく夕を、

田辺：揺れ動く衣片の糸伝ひに、わが温順なりし幼時の赤の反射光を曳き、また羞恥の

矢内原：私の素直な幼さの赤らむ照り返しを旅ゆく一片の布糸になびかせて、羞らひの

鈴木：わがおほらかなる幼少のこの世の旅の断片の糸をつたひて、／頬赤らむる朱の色の反映を　誘ひて、
羞恥の

平井：私の素直な幼年時代のくれないの反映を、／心の旅路のきれぎれな糸のままに曳き、

井沢：おとなしきわが幼年のくれないの赫らむ反映を／空わたる布ひとひらに靡かせて、ああ羞らひの

中井：鳩たちに慈しまれた黄昏時を蘇らせてくれるのだらうか、／穏やかだった幼な時の残んの紅を映して一
片の布を引いてゐた一筋の雲を、

189

Et trempe à l'émeraude un long rose de honte?

菱山：また碧玉の色に、羞恥の、丈長い薔薇を濡らす夕を？

田辺：丈長き薔薇を、碧玉の色に浸す夕を。」

矢内原：たなびく薔薇色をエメラルドに染めてゆくあの夕を。

鈴木：薔薇色を長く緑玉の空に涵せる　夕暮の思出を。

平井：緑玉の色にたなびくはじらいの薔薇色をひたす、とある夕を。

井沢：ながきながき薔薇の色をさみどりに涵す夕を？

中井：羞らひの薔薇色が長い尾を引いて鮮やかな緑に浸ってゐたあの夕べを？

〔八〕

190-191

SOUVENIR, ô bûcher, dont le vent d'or m'affronte, /Souffle au masque la pourpre imprégnant le refus

菱山：思ひ出よ、おお　火刑の台座、その黄金色の息吹が私にあらあらしく迫って来る、／その仮面のまま吹
き燃せ、朱の血の色を、

田辺：「その金色の風はわれを冒し凌ぐ」「火炎に燃えて、わがありし過去のわれと異なるわれなることを、

矢内原：思ひ出よ、ああ火葬場よ、金の炎で私を襲ふ思ひ出よ、私の顔に吹きつけよ、炎と燃えるこの私が

鈴木：思出よ、おお火刑の薪よ、その黄金の熱風はわれを冒して、／紅を　仮面に吹きつけ、今炎え上るわが
身は　昔平井：憶い出よ、おお火刑台、その金の風がわが身を冒す。／紅蓮は私の仮面に吹きつけて、昔日のわれなら
ぬ

井沢：思ひ出よ、黄金の風にわれを襲ふ、おお火刑場よ、／この仮面に吹きつけ来れ、火ともゆるわれ自らの

中井：思ひ出よ、火あぶり台よ、真っ向から吹きつける黄金の風よ、／吹きつけて、この仮面を拒絶の色の明
るい赤で彩れ、

192-193

D'être en moi-même en flamme une autre que je fus... /Viens, mon sang, viens rougir la pâle circonstance

菱山：私自らが炎となつて燃え上るのを拒むやうに、別のものだつた私に、徐ろに滲透する朱の血の色を……
／来たれ、私の血汐、

田辺：みづからこぼむ拒絶に滲む赤の色を、顔面に吹きつけよ。来れ、わが血よ、神聖なる距離の碧空が浄化
す青白き過去の事情を、

矢内原：嘗てあつた別の私であることの拒絶をしみこまず緋の色を…… 来れ、我が血よ、来つて聖い距りの
紺青が

鈴木：ありしわが身にあらざとする 否認に赤き羞恥を滲み透らせよ……／来れ、わが血よ、神聖なる遙か彼
方の蒼空が

平井：心火に燃える身であることを拒む、わが想いをひたす……／来い、私の血よ、来て、くれないに染めて
おくれ、

井沢：昨日の他のわれならずてふこの拒否に滲みとほる緋を……／来れ、血よ、来りて赤く染め出せ、聖なる
距離の

中井：焰と火照るこの私はかつての私であってはならぬ……／私の血も昇って、距離によって荘厳されて聖な
る青空になってゐた

194-195

Qu'ennoblissait l'azur de la sainte distance, /Et l'insensible iris du temps que j'adorai!

菱山：空が聖らかな懸隔で高貴にしてゐた蒼白な事物の様相と／私がいみじくも愛した時間の非情の虹彩とを
朱に染めに！

田辺：またわが崇めし《時》の無感覚なる虹彩を、蘇らせ、赤からしむるために来れ。

矢内原：気高くしてゐたあの色さめた状況を赤く染め、また嘗て私が愛し、今は認められぬ時間の虹を赤く染
めよ！

鈴木：高貴と祭りし蒼白なる事情と また わが礼拝せし／時間の感覚なき虹彩とを、情熱の朱に染めに来れ。

平井：神聖な時の距りの群青に高貴に染まった青白い過去を、／また私が憧憬した不感の時、の虹を。

井沢：群青によりて貴くありしこの淡き境を、／はた嘗てわれが崇めし無覚なる時間の虹彩を！

中井：色薄いあの辺りを紅にせよ、／かつて崇めた、無感動の時の虹、動かぬ過去の虹彩を！

196-197

Viens consumer sur moi ce don décoloré; /Viens! que je reconnaisse et que je les haïsse,

菱山：来たれ、私の上にこの色褪せた天賦の才を焼きつくしに。／来たれ！ 私が認め、私が彼等を憎悪する
やうに、

田辺：来りてこの色褪たる天賦の贈物をわが上に消費し焼き尽せ。来れ、この驚き恐るる幼児を、この共犯の
沈黙を、

矢内原：来つて、この色褪せた贈り物を私の上に焼きつくせ。来れ！ かのわななく少女、その少女に味方す
るあの沈黙、

鈴木：この色褪せし天稟を、わが身の上に尽滅せよ。／来れ、この影にも驚き易き子を、この共犯の沈黙を、

平井：私の上に来てこの色褪せた天の賜物を消尽しておくれ。／来い、このおびえやすい少女、共犯者である
この沈静を、

井沢：来て、われがうへにぞ燃せ、色あせしこの賜物を。／来れ！ かのわななく少女、かたうどのかの静寂
や、

中井：血よ、来て、こんな色の抜けた賜はり物は私の上で燃やし尽くせよ。／血よ、来てほしい、しかと認め
て憎み、退けたい、

198-199

Cette ombrageuse enfant, ce silence complice, /Ce trouble transparent qui baigne dans les bois...

菱山：この猜疑の子を、この加擔する沈黙を、／森のなかを潤すこの透明な不安を……

田辺：森の中を潤すこの透明なる不安を、われが感謝した憎悪するために。

矢内原：また森に浴するあの透明な惑ひを私が再び認め、憎まんがために……

鈴木：森のさなかに浸りたるこの透明なる錯乱を、／われが認識するために、われの憎悪するために……

平井：森の気に身をひたすこの透明な心乱れを、／私が認識し、忌み嫌うようにと……

井沢：はた森のなかに浸れる透明のかの混濁を、／今またわれが認めて、そをわれの憎まんがため……

中井：影に脅えてゐた幼い乙女の私の姿も、／影の共犯だった静寂も、森を浸してゐた目に見えない怪しの騒
ぎも……

200-201

Et de mon sein glacé rejaillisse la voix /Que j'ignorais si rauque et d'amour si voilée...

菱山：冷やかな私の胸から、／噎れた、愛情で被はれた、私の知らなかつた声が、迸る……

田辺：しかしてまたわが凍れる腹胸より、わが識らざりし、かくも噎れかくも愛に被はれたる声が、迸り出づ
るために……

矢内原：そして私の冷えきつた胸から、かくも噎れ、かくも愛で蔽はれてゐるとは知らなかつたあの声が再び
迸り出るために……

鈴木：而して凍れるわが胸より、かくまで恋に炎えながら／かくまで噎れるたりとも 知らざりし声の再び迸
るために……

平井：そして冷えきつた胸の奥から未だ曾つて知らぬまでに、／愛欲に蔽われてしわがれた声がほとぼしるよ
うに……

井沢：さてはかの、かくも噎れ、かくまでに愛に曇ると／知らざりし声、わが冷やき胸よりまた生れんため……

中井：凍った胸から声を限りに叫びたい、／私の声もいつしかひどく愛にくぐもり噎れてゐた……

202

Le col charmant cherchant la chasserresse ailée.

菱山：天翔ける狩の女を仇に優しい頸が求めながら。

田辺：妖艶の頸は翼ある狩の女を求めて。」

矢内原：蠱惑の頸は翼ある狩の女を探し求めて。

鈴木：翼ある狩の女の月影を 愛らしき頸を廻らし求めつつ。

平井：魅力的な私の首は翼ある狩の女神を求めながら。

井沢：魅惑する頸は翼ある狩の女をひた求めつつ。

中井：翼ある狩りの乙女を求める神の白鳥の頸の妖しい魅惑。

203-204

Mon cœur fut-il si près d'un cœur qui va faiblir? /Fut-ce bien moi, grands cils, qui crus m'ensevelir

菱山：私の内心は、いまにも弱り果てるひとつの心情に、これ程近くあつたのか？／それはまことに私だつた
のか、大いなる睫毛よ、

田辺：「わが胸は、弱り行く胸にかくも近かりしか。大なる睫毛よ、汝の威嚇の背後に

矢内原：私の心は、弱り果てようとする心のこんなにも近くにあつたのか。大いなる睫毛よ！ お前の暴行に
微笑みながら、

鈴木：その夕 わが心は 気も絶え絶えの心の傍らに在りたるか。／正しくわが身か、長き睫毛の人よ、迫る
あなたに

平井：わが心はそれほど崩れようとする瀬戸際にいたのか。／長い睫毛よ、あれはたしかに私だつたのか、

井沢：弱り入る心にかくも、わが心、近くありしか？／大いなる睫毛よ、汝が脅かしに笑むころよき

中井：あの時、私の心は息も絶え絶えになりゆく一つの心のそれほども傍にあつたのだらうか？／あれは果し
て私だつたか、私の眼を長い睫毛に半ば閉ざし、私を脅かす睫毛に向かって

205-206

Dans l'arrière douceur riant à vos menaces... /Ô pampres sur ma joue errant en fils tenaces,

菱山：お前等の威嚇に、心持ちよい背後の優しさに私を隠さうと思つたのは……／おお 葉をいただく葡萄の

枝よ！ 私の頬の上に強靱な糸をなしてさまよふもの、

田辺：笑ふやさしさのうちに埋まると信ぜしものは、確にわれなりしか。おお、葡萄の葉付きの枝よ、強き糸にひかれさまよふわが頬の上に当る、

矢内原：後味の快さの中に身を埋めると信じてゐたのは、ほんたうに私であつたのか…… おお、絡みつく糸となつて私の頬の上にさまよふ小葡萄の枝よ、

鈴木：微笑みて、内心の和みの裡に 身を埋めむと思ひしは……／おお葡萄の枝よ、糸をなしてわが頬の上に執拗にさ迷ふ枝、

平井：お前の脅迫にも微笑を返す奥深い甘美さに身をうずめようと思つたのは……／おお葡萄の蔓よ。私の頬の上にうるさい糸のようにもつれかかる、

井沢：内心に、身を埋むると思ひしは、抑もわれなりし……／おお枝よ！ わが頬のうへ執拗の糸とさまよひ、

中井：嘲りの笑ひを返しながら、背後の甘い居心地の良さをいっそ経帷子としてまんまと私を埋めおほせたと思ひ込んでゐたのは？……せはしなく私の頬を這ふ粘い蔓草の糸の滴り……

207-208

Ou toi... de cils tissue et de fluides fûts, /Tendre lueur d'un soir brisé de bras confus?

菱山：それともお前……睫毛と流れ動く木々に織り出されて、／取留めもない腕かひなに砕かれた夕の優しい微光よ？

田辺：それともそれは、織毛と流動する幹とにて編まれ、不確なる腕に砕かれたる夕のやさしき光、汝なりしか。」

矢内原：それともお前…… 睫毛と樹々の流れとで織りなされ、纏れた腕で破られる夕のやさしい微光よ。

鈴木：或は汝……睫毛と溶けし木の枝と 機はたに織られし、／絡み合ふ腕に砕けて散る夕の 穏やかなる微光、汝なりや。

平井：それともお前は……睫毛と流れるような樹々の幹との織りなす、／惑乱した腕に傷つけられた、とある夕のやさしい微光なのか。

井沢：或は汝あるなれ……流れる幹と睫毛とに織り出されて、／絡みあふ腕に破るる夕暮のやさしき微光ひかり？

中井：それとも、ああ、水のやうに自在に変わる樹の幹と睫毛とに織りなされて、絡み合ふ腕に砕け散った黄昏の仄かな光の優しさ、あれは果してうつつだったか？

(II) 終わり